

弁才天女考

坂 内 龍 雄

インドで弁才天女(Sarasvati)は、仏教、ヒンドウ教、ジナ教に共通して祀られる。

一九七五年二月十七日、カルカタで夜おそくまでサラスヴァティー祭をみた。後背のついた等身大の女神の山車が大通をいくつもねり、子供達が銅羅をならしてトラックを乗りまわし、陽気な祭である。女神は宝冠をつけ、眼黒く旋毛でなく髪長く黒く肌白く、眉と眼と口もとのつり上つた微笑の妖麗な美女である。ベンガルのサラスヴァティー信仰は、ヒンドウ教系ではなく、ターラー(多羅観音菩薩。Tara。救度母。観音の右眼光)の変型バードラカーリー(Bhadrakali 賢黒)と関連があるという。B. Bhattacharyya "An introduction to Buddhist Esoterism" 158.

第一章インドの起源

第一節ヴェーダへ登場

サラスヴァティーは、湖、河、水を有するが原義であつて、インドアーリヤ民族が移動の過程に名づけた聖地聖河の女

弁才天女考(坂内)

性呼称である。インダス河を渡つたこの民族が、ヤムナー(Yamā)河の西のクル(Kuru)地方に到到した頃、ラジプタナ(Rajputana)を流れる、水豊かな、漣やさしい、愛らしい河を、サラスヴァティーとよんだ。現在この河の名を相続するというサラスティー(Sarasvati)河は、砂漠の中にきえる、いわゆる尻無川である。

サラスヴァティー河の考古学的発掘は、第二次世界大戦前からなされた。

リグ・ヴェーダ第七卷第九章には、サラスヴァティーはインダス河ともよばれる。山より海に流れ、俊馬、蘇油、乳、富を授ける恵み多き河神として讃えられる。インドは一般的には馬の生育条件が悪いから、馬の守護神が求められるが、この地方は適したのかも知れぬ。第十卷第七章は河神讃歌で、古代地理をしのばせる河川名がならぶが、この河はインダス河に次ぐ位置を与えられる。リグ・ヴェーダの段階では、サラスヴァティーは言語(Vāc)女神とは別個な女神であつ

た。

ヤジュル・ヴェーダはこの岸で編集されたという。この第十九巻以下には、成功をねがうバラモン、復位をねがう放逐された王、商売の成功をねがうヴァイシャのために、アシシュイン双神、インドラとならんで、サラスヴァティー女神が讃えられる。

これらの祭祀呪文は、さらにアタルヴァ・ヴェーダに展開される。治病法である第四巻第四章は精力増強、第五巻第廿三章は子供の寄生虫駆除、第五章は解毒であるが、女神は主神として登場する。第八巻第七章には、ルドラ、アシシュヴィンとならんで医師とされる。

和合法である第六巻第九章は、女神をたのんで他人を自己の意志に従属させる呪文である。バラモンの福益増大の呪法である第五巻第七章では、女神が吝嗇食欲のアラーティ (Āraṭi) を折伏する。この第五頌に言語の女神 (Vāc-Sarasvatī) として称えられる。国王法である第三巻第三章は、復位を願う放逐された王の呪文である。宇宙創造と神智の讃歌である第十二巻第一章第八頌は、女神の詩的神秘力を讃えている。第六三頌は大地とともに讃え、女神から吉祥と繁栄を祈る。

アイトレヤ・ブラーフマナ (Āitareya-brāhmaṇa) 第二巻第廿九章には、女奴隷の子であるカヴァンシャイルーシヤ (Kavasya Ailūśya) が供犠大会に参加しようとして、バラモン達か

ら資格がないと追放され、砂漠に飢え渴いたとき、水とサラスヴァティー女神に助けられ、讃歌をみてとり、後にバラモン達からリシ (Ṛṣi 見る人、讃歌の教師) と承認された。

これらの例証で分るように、サラスヴァティーは言語文字 (ブラフミー) の発明者であり、従って梵天の妃でもあり、音楽や讃頌の啓示者である。

弁説や医療の智慧が名利をもたらす時代となつて、その智慧から財富の女神とされる。

この河はヴェーダ編纂の聖地として、巡礼者が贖罪のためやつてくる。

第二節 儀軌

(一) 乗物。鵜鳥、フロンンム、孔雀。J. Gonda “Change and continuity in Indian religion” 90. 白鳥。K. M. Sen “Hinduism” 36.

(二) Prāṇa. R. S. Hazara “Studies in the upapurāṇas” Vol. I. Saura and vaiṣṇava upapurāṇas 52.

(三) 仏教側の受容

論争に、音声をよくし、知識を当意即妙ならしめるとして尊崇された。その妙音はマハーヴァムトヤ (Mahāvastu) の第三九五仏名として Vihāravaghoṣa (琵琶鳴音仏) とある。

(1) B. Bhattacharyya “The Indian Buddhist iconography”, 349 以下。般若の密教化である。

i 大弁才天女 (Maha-S) 象徴は右手の与願印、左手の白蓮華。色身白。白蓮華の上の月に坐し、秋月の如く輝き、微笑する。真珠の首飾をつけ、白檀の花の衣裳を着て、三界を照らす十二歳の処女である。四眷族は *pañña* (般若)・*medha* (智)・*smṛti* (記憶)・*mati* (意) であつて、般若四姉妹とは異なる。左道密教では十二歳の処女は十二天をあらわす。

ii 金剛琵琶弁才天女。(*Vajrapāṇā*) 象徴は琵琶の原型ヴィーナアーをひく姿。色身白。一面二臂で四眷族を従える。

iii 金剛秋弁才天女。(*Vajrasaradā*) 秋はサラスヴァティーの別名。三眼二臂で色身白。左手に経巻、右手に白蓮華を持ち白蓮華に坐し、宝冠に三ヶ月をつける。四眷族を従える。

iv 聖弁才天女。(*Ārya-S*) 象徴は蓮華上の般若経。十六歳の処女で、右手に持つ白蓮華上に般若経をのせてある。十六歳の処女とは左道密教で般若をあらわすものである。

v 金剛弁才天女。(*Vajra-S*) 三面六臂。左脚を前に踏み出す、弓の展左の姿勢が特徴。他は大弁才天女に似ているが、この天女は髪褐色で旋毛で、色身は赤。顔は右面青、左面白、三右手には般若経をのせた蓮華、剣、斧、三左手には罽闍杯、宝玉、投輪を持つ。この尊の踏む蓮華は赤である。

(2) S. B. Dasgupta "An introduction to tantric Buddhism" 154. 神経組織の説明の中にイダー (*Idā*) はヤムナー河、ピ

ンガラー (*Piśāṇā*) はサラスヴァティー河、スシユムナー (*Suśumnā*) はガンジス河をあらわすという。ピンガラーは太陽であり、赤色であり、原人であり、呼吸をつかさどる。

(3) 義浄訳金光明最勝王経 (大正十六・四三七下) に、この尊は一面八臂で、弓・箭・刀・鞘・斧・長杵・鉄輪・罽索を持つて自らを莊嚴する。眷族は社会生活に必要な稻・蚕具・筆等をあらわす十五童子である。この尊は梵天妃、那羅延天妃、婆蘇天、閻魔に比定され、韋駄天、マナシ竜王、ヴィシユス、ウマーとならんで弁才の徳を讃えられる。巻七の五つの真言は弁才天讃歌で、護身と学識と招福を祈る。

(4) 宋の天息災訳大乘莊嚴宝王経 (大正二〇・四九下) には、観音の牙より弁才天女を生ずという。言語に関連する。

第三節生活の中の弁才天女

都市人は女神殿を設け、旅役者が来ると招いて上演させる。月に一、二度あつた。(カーマーストラ第四章第七節)。幼女に天女讃歌を歌わせ、その詩を占つた。P. V. Kane "History of Dharmasāstra" Vol I Pat II 811. 現代のヒンドゥーの学生は部屋にこの像をおき、試験の日は特によく祈る。祭日には趣好をこらした像を作る。この日は女子が男子寮へゆくことも認められる。宴会にはエロな歌も出る。

第二章日本における受容

金光明最勝王経は、護国經典として唐代より奈良朝に紹介

され、巻七大弁才天女品による弁才天女信仰は次第に流行した。平安朝には伝最澄、伝空海の弁才天講式がある。河川、湖沼、海岸に弁才天女を祀るようになった。

奈良県の天川の他、竹生島、厳島、金華山、江之島が古来より有名である。役小角伝説によれば、母のかたみの鏡を天川に祀り、唐風美人像では荒行の守護神とならぬから、一面八臂の憤怒像とした。

弁才天女真言は右の經によれば

Namah sarasvatī mahadeviye svāha.

陀羅尼經卷十一（大正十八・八八一下）によれば

Oṃ mahāputra kataravāṅga hastaye svāha.

和製真言は *Oṃ sarasvatyai svāha.*

修驗道の弁才天法には、修驗深秘行法符呪集卷二に、弁才天の大事、摩尼の秘法、八印一明の大事、七月精進の大事、七月結願の作法がある。服部如実「修驗道要典」四九三。

伝聖宝撰の修驗極印灌頂法、最勝慧印三昧耶普通次第、最勝慧印三昧耶六檀法儀軌、最勝慧印三昧耶護摩法に弁才天女がある。日本大藏經修驗道章疏一。

禪家では歳末に書く護符に、歳徳神を中心に、右上に日天子、左上に月天子、右下に大黒天、左下に弁才天を記す。弁才天は後代の俗字である。

弁才天はシナで道教思想と融合し、七福神の一つとなった。

日本では庶民信仰として、九日又は十一日を縁日として流行した。江戸の流行は、武江年表の天保六年（一八三二）をみると井之頭弁天、増上寺芙蓉剎弁天の開帳が記事になっている。

古代日本人は河や海や池に神があると感じ、自然神である女神は持つていたが、礼拝像はなかつた。唐代官女の美人像が将来され、しかも致富出世の方法として重視されつつあつた学芸の女神が紹介されるに至つては、神秘で靈驗あらたかな蕃神として受容された。

先祖崇拜と重なつて家の信仰となつた仏教とは別に、芸能神として、また多分にエロスとして信仰されている。

胎藏界曼陀羅最外院に位置を占める天部の神が、庶民信仰として定着したのは、密教や修驗道の行者による流布の実績によるところが大きいが、陽気な現世利益が庶民の人気をえたものであらう。